

## ソシユール言語論とアポーハ論

上田 昇

### 一序

語の意味に関する現代の言語論には大別して二つのタイプが見られる。一つは語の指示機能を中心として展開するフレীগエ流の言語論であり、他の一つはソシユールに始まる価値体系としての語の意味論である。後者は専ら語の意味を他の語との関連における価値として捉えるが、ソシユールは次のように言う。「フランス語の mouton は、英語の sheep と同じ意義を持ち得るが、同じ価値を持つことはない」(G・ムーナン『ソシユール』大修館 1970, p.159) (ソシユール『講義』)「sheep と mouton の間の価値の相違は、英語には sheep のかたわらに第二の辞項があり、フランス語にはそれが無いという点からくるのである」(ibid., p.160) 「同一言語内では、隣接観念を表わす語はすべて、互いに規制し

合っている。redouter (こわがる)・craindre (おそれる)・avoir peur (不安に思う、懸念する)といった同義語は、お互いの対立によってはじめて固有の価値をもつ」(ibid., p.160)

語の意味をここにいう意義ではなく価値に見るソシユールの理論は、丸山圭三郎氏によって一層強調されたように、認識の言語相対主義に通じる一面がある。つまり言語が異なるということと世界が異なつて分節されている、捉えられていることを意味するというのである。しかしここでの我々の素朴な疑問は、フランス語を母国語とする人にとつても、英語の sheep/mutton の区別を認識することは可能であろう、そして、フランス人は英語を紹介してこの区別を認識するのであるとは言えないであろうということである。英語を解さないフランスの食堂で、mouton を注文したからといって、まるの羊 (sheep) が大皿の上に載(乗)って

くる恐れはあるまい。我々は語の意義と価値の関係を問おうと思  
う。

## 二 意味場

ンシュールの言う「かたわら」「隣接」といった概念は、やが  
て J. Trier の意味場 (Sinnebereich, Begriffsfeld, Sprachliches  
Feld; semantic field) として理論化されたと言えよう。Trier  
は意味場の考え方はンシュールに負うところが最も多いと述べて  
いるが、意味場(=「野」)について次のように言う。

個々の記号が何かをいうのではない。記号全体の組織  
だけが、個々の記号に対して何かをいいうるのである。この  
ように、語は同じ概念の「野」のこのりの語とむすびつき  
あって、自律性をもった一つの全体となり、この全体からそ  
の表示の及ぶ範囲が得られる。或る語の通用価値  
(Geltung) は、それに隣接し、またそれに対立する語の通  
用価値に対して限定するときにはじめてよくわかるようにな  
る。全体の部分としてのみその語は意味をもつ。なぜなら  
「野」の中にしか、意味するという事は存在しないからで  
ある。(J. Trier, Ueber Wort—und Begriffsfelder (語  
の野)と「概念の野」について) 福本・寺川編訳『現代ドイツ意味  
理論の源流』大修館 1975 所収 p.156)

野の一つの「数学的な硬直性をもった」例として、Trier は成

績評価 (五段階) における語 (ungenugend, mangelhaft, ge-  
nuugend, gut, sehr gut) をあげている。つまり、Trier によれ  
ば、成績評価という「概念のブロック全体」は「たがいに一列に  
なつて上や下へと順序だてられている五つの言語的・概念的に部  
分的な野に分解して」いるのである。ただこの場合、「野」全体  
が一つの「線になつてしまつている」のであり、その意味で「現  
実を単純化している」特殊な例であるが、この例の重要な点は、  
「個別の語を精確に理解することは、全体の野とその特殊な構造  
が心に現存していることによつて左右される」ということを示す  
にある。(ibid. p.156-157)

また、「数学化されていない」野の例を weis をめぐるドイツ  
語の語彙の歴史に取り、Trier は次のように言う。

したがつて「野」の分節構造は、時代時代によつてずれてい  
て、その場合にでてる個々の語の意味の変化は、この分節  
構造の変化から理解しなければならぬ。だから数学的には  
処理されていない「野」にあつてもまた、個々の語は、数と  
配置によつておたがいにその意味を規定しあつている。語と  
いつても、それに、同じ概念の「野」から来るその対照とな  
る語が、聞き手にはないときには、意味がない。それで、それ  
に概念の上で隣接する語が一しよにうかんで来ず、またその  
概念の「野」に関与していることを要求するのでなく、さら  
に、それらが押しつめてくることによつて述べられた語の境

界がはっきりとでてこないときには、その語は不明瞭で、またその輪郭がぼやけるのである。(ibid., p.158-159)

以上のように、意味場(「野」とは端的には一つの語群と考えられる。Tierは、「野をそのつどとりまいてる野」(ibid., p.179)、「上位にある大きい野」(ibid., p.189)といった表現をしており、現実の意味場は重層的であると見ているのであるが、我々はまず単層的な意味場の考察から出発したい。

次の二種類の語群を取り上げる。

(1) (牛、馬)

(2) (グー、チョキ、パー)

(1)は一般的な生物の分類であるとして、これは「Tierの言う意味場に該当しないであろう。なぜなら、「牛」にとって隣接する語は必ずしも(1)におけるような「馬」に限られることもなければ、また「馬」である必要もないからである。牛を馬以外の動物も視野に入れて分類するなら(1)の代わりに「牛、馬、羊、豚」や「牛、羊、豚」といった語群が考えられるであろう。つまり「牛」にとって隣接する語は何らかの必要や観点からその都度決められると言える。言い換えれば「牛」を取り巻く語群はad hocにしか決まらないのである。

これに対し(2)はじゃんけんなるゲームにとって基礎的な意味場を提供する。このゲームにおいて「グー」に隣接する語は「チョキ」と「パー」であり、かつその二語に限られる。

さて、(1)は厳密な意味では意味場ではないが、しかし「牛」に隣接するというその隣接性が何らか特定の分類目的や観点によって決められたものであるとすれば、(1)の語群を(ad hoc)な意味場と見ることは許されるであろう。すると、(1)は、

(3) (動物、植物)

といった、より大きな(より上位の)意味場——これまたB500であり得るが——の部分と見ることが可能になるであろう。すると(1)および(3)は全体として、

(4) (牛、馬、動物、植物)

なる意味場を形成することになるが、この意味場はその部分として(牛、馬)なる意味場を持つ重層的な意味場となる。

### 三 意味場のモデル

一つの意味場すなわち語群が存在するとする。我々はこの語群を次のような表1を用いて表わすことにする。

	ホ	ニ	ハ	イ	
ホ	△	×	×	○	×
ニ	×	△	○	○	×
ハ	×	○	○	×	×
イ	○	○	×	○	×
A	○	×	×	○	×
B	×	×	○	○	×
C	×	○	○	×	×
D	○	○	×	○	×
		表	1	表	2
			イ	○	×
			○	×	×
			牛	馬	動物
			動物	植物	植物

表1でAないしDは語を表わし、イないしホを区画と呼ぶ。○

は各区画についてそれぞれの語を適用することが言語慣習上適正と認められていること、×は適用が禁止されていること、△はいずれとも言えないことを意味する。例えば、語Aは区画イ、ロに ついては適正に適用されるが、ハとニについては適用が禁止され、ホについてはどちらでもない。

区画がどのようなものになるかは意味場に応じて様々である。語群(1)、(3)、(4)のような事物の分類の場合に形成される(B、D)のような意味場の場合には、区画として事物の個体あるいはその集合をとればよい。たとえば、語群(4)〔牛、馬、動物、植物〕の場合、イとして牛、ロとして馬、ハとして桜をとれば表2が得られる。

さらに我々は敬語の形成する意味場を考える。この場合、語群における区画に入るものは複雑である。時枝談記は敬語について次のように言う。

素材的事実丙丁は、この事実に関与した丙と丁の関係は勿論のこと、丙或は丁に対する話手甲、聴手乙等との相互の上下関係といふものが明瞭に識別されることによつて始めて完全なる丙丁の表現が完成されるのである。(『国語学原論』岩波1941, p.450)

そして例として次の一連の語を挙げる。

「妻」といふ一語を以て同一概念の凡てに適用することは出来ない。如何なる身分の人の妻であり、又それが話手と如何

なる関係にあるかの上下尊卑の識別によつて「奥方」「夫人」「奥さん」「おかみさん」「女房」「家内」「唄」等の語が必要とされる。(ibid., p.451)

或る女性を話し手が「奥方」と呼ぶとき、その女性の奥方性は、その女性の属性として決定されるのではなく、それはむしろ話し手(および聞き手)との関係において、すなわち話し手の心的態度をも含むところの「場面」において存在するものである。同一の女性であっても、どの場面に置かれるかによつて、「奥方」であつたりなかつたりする。つまり、「彼女は奥方である」なる言明の客観的真偽は決められない。こうして「奥方」「夫人」「奥さん」「おかみさん」「女房」「家内」「唄」から成る意味場について作られるべき表における区画は時枝談記のキーワードの一つである「場面」もしくはそのタイプとなるであろう。(とはいへ、この「場面」を具体的に記述することは困難である。) なお、この場合、語の適用の適正・不適正は、プラトンが「クラテュロス」(『プラトン全集』2 岩波1974, p.143)において論じているところの「正しい」あるいは「正しくない」割り当てに拠るのであつて、「真なる」あるいは「虚偽の」割り当てに拠るのではないと見るべきである。

以上のように、意味場に応じて我々の表における区画の中身は様々であるが、形式的には同種の表(マトリックス)で表わせる。そして、差し当たり意味場における語の価値は、当該の語の全区

画についての適用の正否のボタンによって特徴づけることができよう。ボタンが同じであれば価値が同じであり、ボタンが異なれば価値も異なるのである。しかし、このようなボタンによる語の価値（の形式的な側面）の特徴づけは、重層的な意味場の構造を知るためには不十分である。なぜなら、(4)「牛、馬、動物、植物」、すなわち表2において、「牛、馬」は「動物、植物」を上位の意味場とする下位の意味場であるべきであるが、区画についての適用の正否のボタンによるのみでは、この上位—下位の関係が明らかにならない。つまり「植物」と「動物」が対立し、かつ「牛」と「馬」が対立しつつ「動物」の意味場を形成するという構造が明らかにならないからである。

この表2のような事物の分類といった (ad hoc な) 意味場の場合には、各語について○が入る区画はその語の外延（の部分）であるから、各語について全区画にわたっての適用の正否のボタンから外延が確定し、したがって、この外延の包含関係による階層構造を確定することが可能である。しかし、「奥方」ないし「唄」の場合にはそもそも各語の外延が無意味と言うべきであるから外延の包含関係は存在しない。このような意味場はどのようにしたらその構造が調べられるであろうか。つまり一般的には表1のような意味場の形式的構造をどう調べるかという問題になる。

#### 四 意味場の構造とアポーハ論

意味場について表1のようにして語の適用の正否ボタンが与えられているとき、我々は語の価値の形式的側面を、当該の語群における他の全ての語の適用の正否ボタンを反映する形で定義しようと思う。そしてこの定義を五—六世紀のインド仏教徒ディグナーガ（陳那）の言語論すなわちアポーハ論に基づいて行なおうと思う。

ディグナーガのアポーハ論は次のような主張と特徴を持っている。（詳細は拙著『ディグナーガ、論理学とアポーハ論——比較論理学的研究——』山喜房佛書林、二〇〇一年予定を参照）

① 語の *artha* (意味) は「他の排除」である。

この主張に伴って、たとえば「牛 (*go*)」なる語（種語）の意味として個物や種などが拒否される。つまり「牛 (*go*)」なる語の *artha* は牛の個体でもなければ、種でもないとされる。（ここで、種の意味が曖昧であるが、後世の注釈などにより、牛を牛たらしめるところの實在する普遍たる牛性 (*gotra*) のことと考えられる。）つまり、ソシュールがフランス語の *houton* と英語の *sheep* に関連して行なった価値と意義の区別に沿って言えば、ディグナーガは意義を語の *artha* とは認めない。

② 語の *artha* は多少（大小）の比較が可能である。

たとえば、樹木の一つであるシンシャバーを意味するところの語「シンシャバー」は「樹木」なる語の *artha* を含んでいると思われる。この事態はまた、「シンシャバー」の排除対象 (*apohya*)

は「樹木」のそれより多いとも語られる。したがって、*artha*はいわゆる外延たり得ず、むしろいわゆる内包に親近性を持っている。

③ 普遍・特殊の関係による語群の構造化(階層構造化)が行なわれている。そして、普遍・特殊の関係は②における *artha* の多少に基づく。すなわち、②の例に即せば、「樹木」が普遍語、「シンシャバー」が特殊語である。

このような特徴を有する *artha* を我々ほどのようなものとして理解すべきであろうか。②と③を考慮するとき、①は

④ 語の *artha* (意味) は「他の排除」の末である。

と理解するのが最も自然であろう。語は排除作用の末であり、排除対象 (*apohya*) が増えれば増えるほど特殊に位置するのである。

では、排除作用ないし排除対象 (*apohya*) の多少を何によって測るのであろうか。ここで留意すべきこととして、ディグナーガのテキストによる限り、ディグナーガは「多少」によって個数の比較や個体からなる集合の包含関係を意味してはいないということが挙げられる。排除の数は排除される個体数によってカウントされるのではなく、排除されるものの種類によってカウントされているのである。

我々は表1に沿って、語の *artha* すなわちアポーハ論的語の意味を次のように定義する。まず、語Aの排除対象 (*apohya*) は

Xが該当する区画ハとニであり、Bのそれは区画イ、ロ、ホであり、Cのそれはイ、そしてDのそれはハとホである。次に、それぞれの語について、排除対象のカウントを、排除対象となる区画のいずれかに適用されることが適正な語、すなわち○が該当する語によって数える。Aの場合は区画ハとニのいずれかにおいて○である語は (B、C、D) である。同様に、Bについては排除対象をカウントする語は (A、C、D) であり、Cについては (A、D)、そしてDについては (B、C) である。

このようにして、Aには (B、C、D) が、Bには (A、C、D) が、Cには (A、D)、そしてDには (B、C) が対応づけられる。我々は (B、C、D) をもって直ちに語Aのソシユールあるいは「Herの言う意味での語の価値そのものと見ることは許さないかも知れない。しかし、その価値の一面面と見ることは許されるであろう。そして、何よりも、これによって「Herの意味場の重層性が表現できるのである。すなわち、Aの排除対象(をカウントしたもの) すなわち (B、C、D) はDのそれ (B、C) を含んでおり、したがって、AはDに対する特殊 (DはAに対する普遍) であり、同様にBはCの特殊 (CはBの普遍) である、なぜなら、Bの排除対象 (A、C、D) はCのそれ (A、D) を含んでいるからである。こうして、表1で表わされる意味場は、それぞれがより緊密な関係を持ったA-DおよびB-Cの二系列からなる複合的な意味場であると考えられるのである。

(ディグナーが我々の△のような状況は考慮していないが、我々は、より一般的な立場から論じておく。) 同様にして表2からは「牛」と「馬」が「動物」の特殊であることが分かる。

## 五 語の意味

我々の観点からは語の意味は以下のように考えられる。たとえば、「グー」「チョキ」「パー」とそれに応じた区画が与えられたとして、「グー」の意味が、その語が適正に適用される区画の實質すなわち握り拳だけであるとは言えない。「グー」には「チョキより強い」「パーより弱い」といった意味が含まれているのであり、この意味なしに「じゃんけん」なるゲームは成立しない。そして、この意味は「グー」のアポーハ論的語の意味、すなわち「グー」及び「パー」の排除(否定)に基礎をおいている。さらにまた「グー」「チョキ」「パー」を一つの語群たらしめるもの、すなわち「チョキ」と「パー」を「グー」に隣接せしめるものはこのゲームに他ならない。このように、「グー」は三つの面からその意味が与えられる。すなわち、(1)区画の實質(握り拳)、(2)アポーハ論的意味(「チョキ」の排除と「パー」の排除の束)、(3)語群を語群たらしめる状況(「じゃんけん」)。

同様に「奥方」の意味は、(1)区画の實質(当該人物と話者と聴手のそれぞれの身分関係や当該人物の属性)、(2)アポーハ論的意味(「おかみさん」等の排除の束)、(3)語群(敬語)を語群たらしめる文化的状況から生ずる。

## 六 むすび

語は一般的にはその適用が正しいことが望まれる。しかし、科学上の言語と異なり、日常の言語は必ずしもこの要求には従わない時がある。たとえば、落語などで「噺」と呼ばれるにふさわしい登場人物をあえて「奥方」と呼んで笑いを誘うといったことが行われる。そして、語を敢えて不適正に使用する効果は様々である。たとえば、平社員を「社長」と呼ぶことは、時には当人に対する侮辱であり、時には親愛の情を示すことになろう。いずれにせよこのような場合、我々はいわば語によってその対象を仮想的状況つまり別の区画に運んでいるのである。対象をその語の適用が適正であるような仮想的状況(区画)に置くのである。それがおかしみを生むか、侮蔑となるか、慰めとなるかは語の使用される状況次第であるが、いずれにせよ、これらは「噺」と「奥方」、あるいは「平社員」と「社長」のアポーハ論的語の意味の対立関係なしには生じない効果であると思われる。

(うえた・のぼる、インド仏教・論理学、目白大学助教授)